

現代と故郷喪失

ハイデガー後期思想に即して

平 山 浩 章

現代における科学の発達には目覚ましいものがあり、我々は生活のあらゆる面で科学の成果を利用して
いる。しかし、科学の発達と同時に環境破壊や社会機構の巨大化をももたらした。人間が巨大な機械の
小さな歯車の一つに譬えられるのはよく耳にする話である。また我々は価値観の相対化とか情報量の膨
大化、更には原子力の脅威の中で、自己を失い、押し流されかねない。こうした状況の中で、「故郷」
とか「土着性」ということが盛んに言われてきた。

現代のこのつびきならぬ状況を、その由来にまで遡って尋ねようとした思想家の一人として、ハイ
デガーの名を挙げることができるであろう。そこで、「故郷喪失」という現代の象徴的事態を示すと思
われる言葉を巡って、ハイデガーの思想を手懸りに、以下に述べてみたいと思う。

故郷喪失の中で求められているのは、紛れもなく「故郷」である。では、求められている「故郷」と
は一体どのようなものであるのか。故郷とは、普通には、我々の生まれ育った土地のことである。しか
し、「故郷喪失」を感じているが、単に自分の生まれ育った地という意味での故郷から離れている故に、
喪失感にさいなまれているというわけでは、無論ないであろう。故郷にありながらも「故郷喪失」を感
じることもあり得ると思われる。だからこそそれは、故郷を後にして異郷へ旅立つという形であらわれ
ることもあるのである。次に示すヘルマン・ヘッセの文章は、そのような者の姿を良く言い表わしてい

るのではなからうか。

「子供の頃、私はしばしば一人で高い山の上に立った。そして眼は遠いかなたを、そのうしろに世界が深遠な碧い美となって沈んでいる、最も遠い柔かな丘の上にきらきらと光る露をいつまでも見つめていた。(中略)近くに横たわる故郷の土はいかにも冷たく、いかにも鮮かすぎて、まるで雰囲気も秘密もないように思われた。そしてあの丘のむこうのほうでは、すべてが実に柔らかく鳴りひびき、美しい調べと謎と誘惑とに満ちあふれていた。」¹⁾

ここでは故郷は、温みもなく、「雰囲気も秘密もない」、露骨な現実でしかない。述べられているのは、故郷に居る者の喪失感と彼方への憧憬である。ところで、このヘッセの文章を読んでもすぐ気がつくのは、これがまるで我々の気持ちと同じものを言っているのではないかということである。ヘッセは故郷にあって、しかも何かを求め、故郷を後にしようとする。我々は、故郷の喪失を感じ、故郷へ帰りたいと願う。方向は確かに逆のようであるが、求められているものは何か一つのものであるように予想されるのである。事実、ヘッセは続けて次のように言うのである。「彼ら(彼方への誘惑)のうちに故郷を感じ」と。ここではヘッセもまた「故郷喪失者」なのである。では故郷に居る者も、故郷から離れているものも等しく求める「故郷」とは一体何であるのか。

我々が「故郷喪失」の中で抱いているイメージをまず探ってみよう。そこで表われてくるのは、「よるべなさ」、「さすらい」、「疲労」、「渴望」、「空しさ」といった一連の不安定性と喪失感である。しかし、この喪失感とは、言わば何か自己の外にあるものの喪失というよりは、むしろ自己の内の何かが失なわれているといった喪失感ではなからうか。ハイデガーは、「∧故郷喪失」(Heimatlosigkeit)の中でさまようのは、人間だけではなく、人間の本質もさまよう(umherirren)²⁾と述べている。我が「故郷喪失」の中で感じているのは、なによりもまず先に、自己の本質の喪失、即ち人間の本質の喪失ではなからうかと思われる。ハイデガーは、このような人間の本質の喪失は、従来人間性の規定を

巡って種々なされてきた「ヒューマニズム」に由来すると考えている。ここでは我々はいささか意表をつかれたように感じる。我々は現代の社会を非人間的な社会と言うことがよくある。だからこそヒューマニズムの高揚が必要なのだと考えたりするからである。しかし、ハイデガーは、むしろ現代の「故郷喪失」はヒューマニズムに由来すると説く。だからといって、ハイデガーは、非人間的なものを思考せよと言っているわけではない。では、ハイデガーにとって、「ヒューマニズム」とはどのように考えられているのだろうか。

ローマの「ヒューマニズム」は、バルバロイと区別される人間という意味に、更に、ギリシャ人の教養を身につけた人間を、人間らしい人間として扱っている。ここでは「ヒューマニズム」は、ローマ的人間にギリシャの教養を身につけた者という意味になっている。しかし、人間の本性をいかに見るかがヒューマニズムだとすれば、ローマ時代の後にも様々なヒューマニズムが出てくることになる。ハイデガーの挙げているところによれば、マルクス主義やサルトルの実存主義が、人間本性への言及を含む限りヒューマニズムであり、キリスト教も、人間の魂や人間性への言及のある限り、一種のヒューマニズムということになる。しかし、ローマのヒューマニズム以来、あらゆるヒューマニズムを通じて、常に自明なこととして前提されてきた「人間の本質」は、人間が理性的動物であるということである。この「理性的動物」は、しかし「理性をもたぬ動物」から区別されて規定されているのであって、何らかの種差を付加するにしても、結局は、「人間性」は「動物性」から考えられることになる。このような存在者から人間の本質の規定は、ハイデガーが言うところの形而上学の流儀である。これまでのあらゆるヒューマニズムは、結局のところ、何らかの存在者から人間の本質を規定しようとしてきたとハイデガーは言う。要するに、最近類や種差によって説明する形而上学の流儀では、人間性を把握するにあつて、常に存在者から規定せざるを得ず、「無」や「存在」を思考し得ない形而上学はいつでも存在者にしか該当しないのであり、そのような形而上学に人間の人間性を果して把握することができるのか、形而

上學にはそのような道は閉ざされているのではないか、というのがハイデガーの主張である。つまり、従来の「ヒューマニズム」は、「人間らしからぬもの」から逆規定されたものであり、本来的に「人間らしさ」そのものを言うものではないということになる。それでは、こうした「形而上学」的ヒューマニズムは、何故「故郷喪失」をもたらすことになるのであろうか。

ところでその前に、ハイデガーは現代の世界を特異な歴史的な眼で見ていた。それ故彼は次のように言うのである。「（故郷喪失）が世界の運命（Weltschicksal）となる。だからこの宿命（Geschick）を存在史的に思索することが必要なのである」^③と。過去二千年以上にわたって世界を貫いてきたものを考察する必要があるとハイデガーは言うのであるが、そのさい彼の念頭にあるのは、二千年に及ぶ形而上学の歴史であろう。ハイデガーの指摘するところによれば、ローマの「ヒューマニズム」以来の様々な「ヒューマニズム」も、形而上学に根差したものである。形而上学的思考は、古代から現代に至るまであらゆる時代にわたって、人間の思考を支配し、それは近代において、技術というかたちでより顕著に表われた。形而上学的思考として、或いは流儀としてハイデガーが批判する第一の点は、形而上学における主観と客観の関係であり、主観が対象を表象的に把握するという主観主義的な考え方である。主観（Subjekt）という言葉は、ラテン語の（Subjektum）に由来し、これは根底に横たわるものを意味している。従って、主観が表象的に対象を把握するとは、主観が自らをすべてのものの根底に基体として据え、自己の枠内で対象を自己の前に置くことを意味する。しかし、この形而上学の流儀では、「無」や「存在」を把握することは出来ない。なぜなら「無」は、もはや対象としては成立しないのであるから、「無」を思考することは不可能となり、一方「存在」は、これを定義しようとすれば、循環論証に陥るために、「無規定な直接的なもの」^④として、自明のものとするか、或いは存在者をもって取り違えているかである。しかも我々は日常生活において頻繁に「ない（無）」や「ある（存在）」を用いているのみならず、形而上学的規定においても、「ない」や「ある」を用いており、それらの規定を意味ある

ものとしているからには、我々は何らかのかたちで、「無」や「存在」が解っているはずなのである。ただそれらは形而上学のために忘却されてしまっているとハイデガーは言うのである。

主観をあらゆるものの根底に据えようとするこのような形而上学の流儀は、また、主観すなわち人間による物の支配という、近代技術の本質に関わるものでもある。技術は、我々にせわしなく迫り、追いついて、自然に強要し、我々を行き場のない状況に追いつめる。一方、我々は、内面的には「故郷喪失」という不安定な状態に陥っている。

こうして、従来のあらゆるヒューマニズムは形而上学に根差しているのであるから、形而上学の制約の故に、人間の本質、人間性を規定するにあたって、限界を生ずる結果となる。その限界がまた人間を行き場のない状況へと追いつめたままにしているのである。それ故に、我々は従来のヒューマニズムのこの形而上学的限界をのり越えて、新たな人間回復の場を見出す必要があるのである。従って、ハイデガーが「ヒューマニズム」を越えることを主張するのは、非人間的になれということではなく、形而上学を克服することによって、従来の、人間本質把握の試みを乗り越えろということなのである。そして、従来の「ヒューマニズム」を越えて、人間の本質が一体どこにあるのかをつきとめることが肝心なことなのである。人間性の回復が一般にも望まれ、また、哲学的にも大きな課題としてのしかかっている中において、伝統的な形而上学やヒューマニズムの限界を訴えるハイデガーの思索は、我々にとって極めて特異なものに響くのではあるが、ハイデガーの説く、人間の本質の在所とか故郷とかいった、何かへ帰一していく思考そのものは、実は我々にとって馴染みの薄いものではないのではなからうか。例えば、「故郷喪失者」の発言は、或いは言い回しは異なるかもしれないが、次の点で一致している。「何か、自己の核になるものを」である。こういった発言は、我々のよく耳にするものである。「故郷喪失者」は自己の中心点へ帰一することを求めているのであり、それによって自己を生かすものを求めているのであろう。そして、その自己を生かすものを「故郷」と呼んでも差し支えはなからうと思う。この

「故郷」は、また、人間を生かすものである限り、人間の本質の把握と切り離すことはできないのである。では、ヒューマニズムを越えて、ハイデガーはどこへ向おうとしているのであろうか。

形而上学の由来の故にその意義を失ったヒューマニズムであるが、ヒューマニズムが人間の人間としての本性、本質を把握しようとする試みであることは、ハイデガーも認めるところである⁽⁵⁾。それ故問題は、形而上学的思考の方法をいかに克服するかということである。形而上学は存在者の存在に関わりながらも、その存在を示すのには、常に存在者を名指してきたのであり、真に存在者の存在を把握していない。このような形而上学の欠陥を、ハイデガーは「存在忘却」と言っている。従来のヒューマニズムも、この形而上学における存在忘却の故に、バルパロイや動物性との比較といった具合に、存在者からなされることになる。ハイデガーは、人間の本質は存在者によってではなく、存在によってこそ示されるべきだと考えている。この人間の本質的な在り方を、ハイデガーは、「脱存」であるとしている。この「脱存」とは「存在の真理の中へと脱け出て立つ」⁽⁶⁾ことを意味しているのであるが、その存在の真理の場は、「存在の明るみ」である「現」^(Dasein)であり、そこにおいて人間は、「気遣い」つつ、すでにあるものとして、即ち被投的なものとして現存しているのである。この「現」は、また、「存在の近さ」とも言われる。ここでの「存在の近さ」の「の」は、「主語でありかつ目的語を意味する」⁽⁷⁾ものである。これは「存在が、存在のために、関与する」⁽⁸⁾ことを示す。人間もまた一種の存在者であるから、人間は決して存在そのものとなることは出来ない。人間が存在そのものであるとするなら、これは存在を存在者として把握することになるからである。人間は常に存在の「牧者」、「従者」であり、それが「存在の近さ」に留ることであろう、この「存在の近さ」、「存在の明るみ」、「現」を、ハイデガーは、「故郷」とも名付けるのであるが、これについてはハイデガーとヘルダーリンの詩、「帰郷」との関わりを見る必要がある。

ハイデガーがヘルダーリンを本質的な詩人とみなし、ヘルダーリンの詩の解釈を通して多くを語って

いるのは周知のことである。ところで、ハイデガーは、ヘルダーリンのこの「帰郷」という詩を解してこの詩が単にヘルダーリンが郷土であるシュヴァーベンへと帰ることを詩ったものではなく、彼の「故国の同胞」が故郷の本質を自覚しておらず、それ故、まだ彼らの与り知らぬ故郷に親しんで住むことの必要を詩ったものであるとし、それがまた「帰郷」の意味であるとしている。またハイデガーは、他の箇所では、「△帰郷▽とは根源への近くへ帰りゆくことである」⁹⁾とも述べている。従って単に故郷にいたるだけでは、やはりまだ帰郷したことにはならないのであり、「故国の固有の本質」を把握する、すなわち「根源への近接」をなすのでなければ、人は真に帰郷したことにはならないのである。逆にまた、たとえ身は故郷から離れていても、「故郷の本質」を常に見るようにするのであれば、「△帰郷▽が到来する」と言われるのである。この詩の解明においては、「故郷の本質」は「喜ばしき」(Freudiges)として述べられている。つまり故郷には「喜び」が貯えられているのであり、故郷へ帰るものに、根源へと近接するものに、その「喜び」は分ち与えられるというのである。この「喜び」とは、一体如何なる喜びなのであろうか。この「喜び」を、次のように解することはできないだろうか。つまり、故郷にあるその状態が、帰郷した者にとっての本然の姿、あるがままの姿であり、そこがまた彼自身にとって本来あるべき場所である、そうした所に居ることの喜びなのであると。

ヘルダーリンの詩の解明において、ハイデガーが述べた「根源への近接」の「根源」とは、先の関連からいうと「存在」のことになる。またハイデガーは、「現代における△故郷喪失▽の克服は△存在▽からはじまる」¹⁰⁾とも言っている。すると、「根源への近接」は「存在の近き」であり、これはまた「脱存」でもあるから、脱存していることが人間の故郷であり、これがまた、帰郷ということになる。従って、故郷喪失の状況から帰郷することは、ハイデガーによれば、人間が存在の真理、近き、明るみへと脱存していることなのである。しかし、「投企は本質的に被投的な投企である」¹¹⁾と言われているように、この脱存も、人間が勝手に企てたものではなくて、存在による投企なのである。それ故、人間は、いつも

既に脱存しているのである。脱存していることが故郷であるなら、実は我々は常に故郷にいることになる。ただ、形而上学的思考の故に、故郷に居ることの本質を「忘却」しているのである。

ハイデガーによって示された、人間の脱存としての故郷へと帰ることは、「忘却」されていた「存在」を再び「回想」することであり、沈思することである。ハイデガーによれば、考えることも一つの行為である。なぜなら「行為の本質は仕上げること」⁽¹²⁾であり、思考は、存在との関わりを仕上げるからである。この「関わり」の中で思考は言葉をもたらず。しかし、その言葉は、思考が勝手に拵えたものではなく、「存在」から託されたものであるとされる。このように、ハイデガーの思索においては、すべてが存在から存在へと向うのである。こうしたハイデガーの思想においては、我々は存在の一人舞台を眺めるだけで、意志とか決断とか自由をもった人間の出る幕はなくなるのではなからうかと懸念したくなる。そしてこう問いたくなるのである、「存在とは一体何なのか」と。この問いに対してハイデガーは、「存在とはそれ自身である」⁽¹³⁾と答えている。これは我々に何も与えてはくれない言葉のように思われるが、むしろハイデガーは、こうした言葉を理解する「将来の思考」の必要を説いている。これは次のようなことを意味するのではないかと思われる。つまり、我々が「存在とは何か」と問うた時に、我々は既に「存在」を我々にとって、何らかの他者として問う気持ちの中にいるのではなからうか。確かに「存在」は、孤立した主観としての私だけの存在を指すのではないのだが、「存在」はまた私の存在でもあるはずなのである。それ故、ハイデガーにおいて頻繁に表われる、「存在への聴従」とか「宿命(贈り)」⁽¹⁴⁾とかの一連の受け身の表現から、我々は、自己に対立するものとの相剋とか、強制とかを感じ取ってはならないであろう。「存在の贈り」⁽¹⁵⁾などという言葉からイメージされるのは、何か自(然)発(生)的なものではなからうか。それは、存在するものの本来の姿、あるがままの姿を指しているのではなからうかと思われる。そして、故郷が人間をありのままに生かすものであるなら、この「存在の贈り」の場、即ち「存在の真理」の場こそ故郷と呼ばれるにふさわしかろう。

こうして我々は、存在を沈思しつつ故郷に住むのである。そのような人間の姿を、ハイデガーは、ヘルダーリンの「人は詩的に大地に住まう」という言葉をもって表わしている。この「詩的に住む」とは、存在の真理の中に居る人間、即ち現存在が造られたもの贈られたものとして、「諸々の物の本質の近さによって心打たれている (betroffen) ことをいう」⁽¹⁶⁾のである。我々は、自己の本来あるべき場所、自己を最も良く生かす場所に留る時にこそ、「諸々の物の本質」に関わることができるであろう。次のヘッセの言葉も、きわめて日常的なかたちで、そうした人間の姿を示しているではなからうか。

「どんなに貴重きわまる宝石でも、そんなにきれいにされたり、乱暴に取り扱われたりして、なおかつその貴さの輝きを失わないほど文句なしに美しいという物はない。またそんなに高貴な天職もなければ、そんなに豊かな詩人もなく、そんなに恵まれた土地もない。そこで次のようなことは努力し甲斐いのあることのように思われる(中略)朝の太陽や永遠の星に変わりなき敬虔の思いをささげる一方、物を大切に扱い、柔かく物に触れて、存在する一切のものからその固有の \wedge 詩 \vee を奪いさえしなければ、われわれは最も身近なものや、最もささやかなものに対しても、優しい匂いや輝きを賦与することができるのである。すべて乱暴に扱われたものはにがにがしいものとなり、扱った人間の品位をもおとしめる」⁽¹⁷⁾

(了)

註

- (1) 尾崎喜八訳『さすらいの記』(講談社文庫)所収の「碧い遠方」
- (2) “Ueber den Humanismus”, 1947, S.26 (以下〔Hs〕と略す。)
- (3) 〔Hs〕 S.27
- (4) “Sein und Zeit”, 11te. Aufl., S.3
- (5) ただし、ハイデガーは、「本質」を動詞化して用いる。これは、実体とか基体を据える形而上学的

思考を避けるためである。

- ⑥ [Hs] S. 16
- ⑦ (∞) [Hs] S. 5
- ⑧ "Erläuterungen zu Hölderlins Dichtung", 2tc. Aufl., 1951, S. 23 (以下 [EH] と略す。)
- ⑨ [Hs] S. 26
- ⑩ [Hs] S. 25
- ⑪ [Hs] S. 5
- ⑫ [Hs] S. 19
- ⑬ Geschick は存在から schicken されたものである。
- ⑭ "Die Technik und die Kehre", 1962, S. 11を参照。ここでは次のように言われている。「なぜなら、自然に現存しているものは、出で―来―たらす打ち開きを自らのうちに (en heario) もっているからである。たとえば、花が花咲く綻びを花自身のうちにもっているように。」(小島・アルムブルスター訳、理想社)
- ⑮ [EH] S. 39
- ⑯ (1)2回。

(昭和五二年度弘前大学人文学部卒)